

「ロシアに対する恐怖」

増山雄三

二十世紀の開幕早々、日本はロシアの南下を防ぐという目的で、「日露戦争」を経験したが、それは、地球の一角にある極東の、小さな島国に起った、不思議な戦争だった。

日本海海戦で、ロシアの旗艦「スワロフ」が燃え上がって舵を壊し、ぐるぐる回り始めたときに、日露戦争の全てが終わるのだが、しかし、そこから国民の思考が地につかなくなっていく、時代は、そこから悪くなっているってしまったのである。

アメリカのポーツマスで、外務大臣の小村寿太郎とロシアのウイッテとが、日露の和平交渉で、日本側が「樺太をよこせ、賠償金を出せ」と言うが、ロシア側は一向に譲らず、もう一度やるかと、双方条件が合わない。

それに対し、結局はアメリカのルーズベル

トの仲裁で、「食卓の上にシヤケの一匹でも載せたらどうだ」という言葉で、双方は折り合ったが、シヤケとは樺太の事だった。

ところが、戦勝の報告によって国民の頭がおかしくなっていて、賠償金を取れなかったと反発し、日比谷公会堂に集まり国民大会を開いて、交番を焼打ちし、政府は戦争を終わらせるのが精いっぱい、と論評した国民新聞も、社屋を焼打ちされてしまった。

この大会はケネを取れという主旨なので、「政府は弱腰だ。もっと賠償金を取れ」と叫んだが、戦争が終わっても、日本はかろうじて勝ちの形成だったが、それがあと一ヶ月も続いていたら、満州における日本軍は、きっと大敗していただろう。

というのは、ロシア側は奉天での敗戦後、引き下がって陣を立て直し、訓練を受けて輸送されてくる兵員を持ち、弾薬を充実している。平野に展開した日本軍は狙い撃ちされ、撃ち返す弾薬も少ないうえ、訓練された

正規将校も少なく、いきのいい現役兵も、極端に減ってしまったからだ。

日本軍の通弊と言うのは、為政者が自軍の弱点である「手の内」を、国民に明かすという勇氣に乏しく、この傾向はずっとのちまで続いていくが、日露戦争の終末期にも、日本は紙一重で負けるという手の内は、ロシアを利するという事で、一切明かさなかった。

この辺りから、日本はおかしくなっていくが、日本の二十世紀が戦争で開幕した事と、戦争がその国の僅かな長所と大きな短所を、まるでレントゲン写真のように、はつきりと映しだしてくれるからである。

例えば第一次大戦で、陸軍の輸送用の車両や戦車などの兵器に軍艦が、石油で動くようになり、石油を他の国から輸入するしかないという、大正時代の日本は、正直に手の内を明かして、列強なみの陸軍は持てない、というべきであったのだろう。

それで、他からの進入を受けた場合の戦力

に切り替える、というべきだが、そんな事は少しも洩らさず、昭和になって、軍備上の根底的な弱気を押し隠したので、軍部を中心にファナティシズムを蔓延らせ、不正直というのは、国を亡ぼす程の力があるものである。ところで、日露戦争はなぜ起こったのかと言え、それは基本的には、朝鮮半島問題を巡る国際紛争であり、朝鮮半島は、当時の日本の国防論では、地理的な位置が、日本列島の脇腹に突きつけられた刃だと思っていた。その朝鮮に対し、すでに洋務運動に目覚め近代化しつつある清国が、宗主国として色々と介入し始めたので、日本はこれが怖かったため、日清戦争を起こし、日本はこれに勝利したので、清は朝鮮から一応手を引いた。そこへ、真空地帯に空気が入ってくるようにして、ロシアが朝鮮に入ってきて、ロシアは、まるで新天地を見出したかのような振る舞いをしたので、それがやはり日本としては恐怖で、結局ロシアを追い払うために、色ん

なプロセスを経た後、戦争になつてしまふ。
いまから思えば、その後の日本の近代は、朝鮮半島を意識しすぎて、基本的な過ちを犯していくが、この二十世紀初頭に、朝鮮半島などは打ち捨ててよかつたし、海軍力を充実すれば、朝鮮半島がロシアになつた所で、そんなに恐ろしい刃ではなかつた。
しかし、当時の日本における地政学的感覚は、いまでは想像できないほど、怖くて怖くてしようがなく、日露戦争などしない選択肢もあつたが、ロシアが朝鮮半島を経由し、日本の目の前にやつてきた場合は、戦争しない訳にはいかなくなつてしまふ。
それをもし我慢すれば、国民の元気がなくなつてしまひ、元気がなくなると、国家は消滅してしまふのではないかと、当時は国家を保持つてまだ三十年ほどなので、明治の状況では、日露戦争は祖国防衛の戦争でもあつた。
それで、欧露から回航されてくるロシア艦隊を、パーフェクトゲームで、残らず沈めて

しまわねば、日本は戦争そのものを失う。
もし、そのうち数艦でも生き残れば、当時
ロシアの租借地だった、旅順やウラジオスト
ツクに逃げこまれ、そのあと日本海を走り回
って、通商破壊に出てこられるとなると、大
陸に派遣している陸軍が干しられてしまう。
当時、旅順港にはロシアの旅順艦隊が入っ
ていたが、その港外に、日本艦隊の一部が待
ち伏せして挑発したが、ロシア側はやがてや
ってくる、自国のバルチック艦隊と合流する
積りで、その挑発には乗らなかった。
それで日本側は、この旅順を陸側から落さ
ざるをえず、海軍の要請で、乃木希典を軍司
令官とした第三軍を作り、要塞攻撃を命じた
ものの、死者一万余を越えても、要塞を陥と
せぬ、惨憺たる失敗に終わった。
それは、乃木が火力を軽視していた事で、
機関銃を知らなかった彼は、コサック騎兵が
駆使する機関銃になす術もなかったので、伊
地知参謀長は、東京湾防衛の海岸砲を旅順に

持っ ていき砲撃し、これで旅順は落ちた。

日露戦争を戦った陸海軍人は、明治人が持っ ていた、一種の合理主義と健全さを持っ ていたが、外交面でも同じで、福岡藩出身の金子堅太郎と言う人物が、留学してハーバート大学に学んだ時のクラスメートに、のちアメリカの大統領になったルーズベルトがいた。

それだけの縁で、金子は政府に命じられ対米工作をし、日本にとって虫のいい話だが、ここぞという所でアメリカに割って入って貰い、満州の野戦軍総司令官だった大山巖も、《軍配（アメリカの仲介のこと、よろしく願う）》と言い残してでかけていった。

それは勝ちがたい戦争だが、外交によって何とか歯止めをするという、土俵際の覚悟と自分の弱みを、軍自身が手の内を十分に明かし、政治家も軍人も互いに手の内を見せあっ ていたという事だが、軍機という秘密主義で包んだ、昭和の時代とは違う所だった。

令和四年一月、